

伴走型支援に引き継がれるコミュニティ形成の性質

——静岡市のNPO活動を事例として——

静岡英和学院大学 志田倫子

1 背景と目的

今日、地域社会では多くの地域活動がみられ、その把握も難しくなっている。古くは、奥田（1971）が、「コミュニティ形成」の理論で提唱したように、「コミュニティ・モデル」への展開が求められてきた。しかし現在では、町内会・自治会活動に加え、NPO活動、地域おこし協力隊、地方創生など、地域社会を舞台にしたさらに多くの「地域活動」が展開している。

さて、1970年代のコミュニティ・ブームでは、都市化した社会、いわゆる砂漠化した都会のなかでの「人間性の回復」のための取り組みが人々の心をとらえたと理解できる。しかし現在では、地域社会の活動は、人間らしい生活を送るための舞台である、という共通の認識はあるものの、活動の種類によってその目的に若干の違いがみられる。例えば、コミュニティ形成の活動がNPOの活動に移行したことで、人間性の回復や顔の見える人間関係の構築よりも、「働き続ける人生」といった定年後の「仕事」としての意味合いが強くなっているようにも思われる。

そこで現代においては、「コミュニティ形成」の目的は、市役所などの行政が企画するコミュニティ・カレッジなどの市民講座を受講して、「学ぶ」ことで、初めてその正確な意味やねらいを理解できると推察できる。

本発表では、静岡市が主催する市民講座「地域デザインカレッジ」を受講した市民が、「コミュニティ形成」をどのように理解して、地域活動に参画していくのかを分析することを目的とする。

2 方法

本研究では、静岡市が主催する市民講座「地域デザインカレッジ」を受講して地域活動を始めた活動団体のうち、「宇津ノ谷倶楽部」をとりあげる。研究方法としては、2016年以降実施してきた社会調査（「地域デザインカレッジ」での観察調査、「宇津ノ谷倶楽部」でのインタビュー調査を中心とする）によって実態の把握につとめた。

3 結果

対象とした活動は、静岡市丸子で活動する「ふるさとづくり」を目的としたものであり、「伴走型支援」を特徴としている。すなわち、その地域の住民が、地域性・共同性によって、自分たちのまちをつくりあげていった、かつての「コミュニティ形成」とは違い、その地域とはゆるやかなつながりのある他の地域の住民が関わることで、地域を活性化させている。報告では、属性などの階層、地域構造と関連させながら活動主体を分析するとともに、地域住民とどのような連携をしながら活動を展開させていくのか、といった意識や態度、人間関係の変容について分析を試みたい。

4 結論

地域性と共同性をもとにした地域住民によるかつての「コミュニティ形成」とは違う点としては、伴走型支援であること、よそ者であるために、地域住民との人間関係の構築の必要性などがあげられる。しかし、活動テーマの見つけかた、まちづくりの契機をもとにした集団内でのきめ細かい人間関係などは、活動主体に大きく影響している。

（文献）

奥田道大「コミュニティ形成の論理と住民意識」磯村英一編 1971『都市形成の論理と住民』、高橋勇悦 1999『今日の都市社会学』学文社ほか